「長寿国日本」にタマゴあり

東洋システム㈱
代表取締役社長
安田　勝彦

あけましておめでとうございます。

長寿世界一の背景として魚の消費量が多いことはよく知られていますが、一九九四年以来一人当たり消費量世界一を達成しているタマゴも、長寿世界一に大きく貢献しているように思います。

▽王座への道程

この原稿を書くため、インターネットでタマゴ消費に関する情報を集めてみました。その中の一つに、「もったいないのココロ」ほか新しい視点で原稿執筆に取り組んでおられる石田豊さんの「世界一のタマゴっ喰い」のページに、「王座への道程」という面白い一文がありました。

一九六一年、日本の一人当たりタマゴの消費量は九㌔で世界二十位、当時の首位は米国。一九七〇年に一六・四㌔になり五位、当時の首位はイスラエル、一九九四年一九・四㌔で首位に躍り出て以降その座をキープ。二〇㌔の大台突破は一九九三年（大台を突破したが、当時はハンガリーの鶏卵消費も旺盛で、日本は二位）にあったがその後は、一九㌔ながら首位。

農水省統計によると二〇〇四年の鶏卵流通は、二百六十二万㌧で、総務省による同年の人口一億二千七百万人で割ると二〇・五㌔となり、近年は再び二〇㌔の大台を超えています。

▽ビジネスとしての消費拡大

昨年十一月、たまご博物館の高木館長さんと歓談する機会があり、高木館長さんは大のタマゴ好きで一日五個食べるというお話しでした。

森光子さんの三～四個は有名な話になっていますが、五個には驚きました。コレステロール問題解消以来、私は一日二個にし、業界に寄与しているとひそかに自負しておりましたが、上があるものだと感心しました。

二〇〇二年、米国心臓医学会でタマゴのコレステロール問題に終止符が打たれ、その後、ボケ防止、ガン予防などに効果のあるコリンをはじめ十余の微量成分が評価されるようになり、タマゴの消費拡大の可能性は、日本が一人当たり消費量世界一に立った一九九四年当時に比べ、格段に大きくなっていると考えます。

江戸時代に刊行された「卵百珍」に代表されるタマゴの豊かな食文化、最近では多様な特殊卵の誕生。たまご博物館のデータによれば、特殊卵の種類は一九九八年百種、二〇〇〇年五百種、二〇〇六年現在千百三十九種…。世界に類を見ない数字だと思います。

智恵と努力で、質、量とも世界に冠たるタマゴ王国を作れる素地が日本にあると考えます。タマゴかけごはんが話題になる事例もあるように「最近の若い人は生タマゴを食べなくなった…」などは、タマゴのマーケティング次第で流れが変わるような気がします。

智恵と努力をビジネスとして軌道に乗せていくためには、投資が必要になることも現実だと思います。日本鶏卵生産者協会では会費として、飼料キロ当たり八銭を、羽数割合約七〇％の生産者の方々が積み立て、年間約三億円弱の資金が消費拡大などのために用意されていると聞いています。これをさらに一歩進め、配合飼料比率が非常に高い日本のレイヤー業界の特性を生かし、生産者と飼料メーカーとの間で、消費拡大をサポートする積極的な積み立てに向けビジネス的な合意が実現できないものでしょうか。

飼料出荷ベースであれば、より安定した、より潤沢な資金の蓄積が可能になり、世界に冠たるタマゴ長寿王国が実現する可能性があります。

一昨年には食育基本法が制定され、食に関する啓蒙の場が整備される方向にあります。この流れをしっかり捉えるためにも、まとまった資金を、鳥インフルエンザ問題など業界共通課題に対する備えの強化ともし、世界に誇れる日本の養鶏を築く時に来ているのではないでしょうか。

設備会社の立場からの的はずれな議論かとも思います。お正月のめでたさに免じお許し下さい。

（岐阜県各務原市金属団地九七―四）

鶏鳴新聞
2007.1.5